

世界神学とは③—変わりゆく時代と宗教—

天理大学人文学部准教授

澤井 真 Makoto Sawai

変わりゆく時代と宗教

入試シーズンが本格化している。日本では、2020 年以降、大学への入学希望者の総数が、全国の大学の入学定員総数を下回る「大学全入時代」を迎えたと言われている。公立高校の授業料無償化や、高等教育の修学支援新制度の充実など複数の要因があると思われるが、天理教の管内学校を入学先として考える保護者や子弟子女が減少傾向にある。

また、日本は少子高齢化社会にすでに突入した。海外から技能実習生を受け入れているという事実は、誰もが知っているところである。コンビニエンスストアや飲食店で働く外国人労働者を見かける機会も増えた。

天理大学もまた、こうした時代の荒波を受けている大学の一つである。2024 年 4 月、天理大学宗教学科に入学した新 1 年次生は 9 名であった。2002 年 4 月、筆者が同じく宗教学科に入学した際、入学者数が約 90 名であったことを考えると驚くべき数字である。このように、変わりゆく時代の流れを私たちはどのように捉えていけばよいのだろうか。

世界をどう認識するか

私たちはグローバル化する世界と関わって世界に目を向ければ向けるほど、世界における変化のスピードに気づかされる。私たちが世界に関する情報を容易に得ることができるならば、世界の人もまた私たちの情報を、これまで以上に得ることができるのである。そうであるならば、私たちはお互いのことをより良く知ることができるようになったのだろうか。

私たちは誰かの宗教や信仰を認識するとき、目に見えるものを通して認識する。ここで言う目に見えるもののなかには、実際に信仰する人々だけではなく、教義や聖典、儀礼などが含まれる。これらは、いわば外から見た宗教である。

一方で、これまで 2 回にわたって取り上げてきたウィルフレッド・C・スミスは、『世界神学をめざして』のなかで、宗教や信仰についての異なった見方を提示する。「その伝統が人々にとってのもつ意味」と彼が述べるように、内から見た宗教と言える。彼は、仏教を例に挙げながら以下のように述べている。

仏教徒の信仰を理解するには、「仏陀」と呼ばれる何かを見てはならない。むしろ可能な限り、仏教徒の目を通して世界を見なければならぬ。これをする能力は、仏教の教義、仏教の聖典、仏教芸術、仏教の儀礼、仏教の歴史、仏教徒の言語、その他に親しむことで高めることができよう。しかし、それは重要ではあっても、せいぜい第一歩に過ぎず、それで満足してはならない。

仏教徒の信仰は仏教的伝統の資料のなかにあるのではない。⁽¹⁾

過去、現在、そして未来という言葉で時間について語るとき、いまを生きる私たちは時間の流れの最前線にいる。刻々と変化する時間の流れのなかで、これまで仏教に関して、その開祖であるブッダをはじめ、経典や美術を通して仏教という宗教の一端を理解しようとしてきた。それらは、いまを生きる私たちに影響を与える一方で、あくまで過去に作成されたものである。

仏教的伝統が人々にとってのもつ意味

したがって、仏教という宗教をよりリアルに、より生き生きとした仕方理解するには、仏教徒の目を通して見える世界から理解する必要がある。

仏教徒の信仰は、仏教徒の伝統の資料の中にあるのではない。それは人間の心の中にあり、その伝統が人々にとってのもつ意味であり、その伝統の光の中で宇宙が彼らにとってのもつ意味なのである。⁽²⁾

こうしたスミスの宗教理解は、「宗教の内在的理解」と呼ばれる理解の仕方の一つである。言い方を少し変えるならば、仏教という宗教は、仏教徒にとって仏教という宗教がもつ意味や意義を指すということになるだろう。このように言われてしまうと、私たちは、国籍や言語が異なる人々が生きる世界において、仏教徒にとっての意味を理解することなど不可能だと思ってしまう。しかしながら、私たちもまた「進行中の人類史の多様なプロセスのなかにあるもの」⁽³⁾である。

スミスが挙げる月の例を見てみよう。自然科学の発展によって、私たちにもたらされる月の客観的知がある。一方で、それは古代バビロニアにおける月をはじめ、人間の生活や文化において占めてきた意味の知とは異なる位相にある。そのため、月に関する客観的知は人文科学においては低い。

コロナ禍で家族葬が増えたように、日本の葬送のあり方は大きく変わってきている。これは、こうした目に見える変化を下支えする仏教徒にとっての仏教という宗教の意味が変わってきている変化の一端として捉えることもできよう。

各宗教の神学と世界神学の関係性

呼び方の違いこそあれ、各宗教伝統における「神学」という営みがある。例えばキリスト教の神学者トマス・アキナスが生み出したのは、キリスト教的な神学でもキリスト教的信仰の解釈でもなく、キリスト教的な見方の神学であり、信仰についてのキリスト教的解釈であった。彼は人間の信仰や神への信仰を考える神学を、13 世紀に生み出した。

スミスは、「○○神学」—キリスト教神学 (Christian Theology) やイスラーム神学 (Islamic Theology) —と、神学の前に形容詞を付けて呼び表わされるようになったのは 19 世紀後半以降であることを指摘する。各宗教の神学的営為は、自らの信仰にしたがって神学を構想してきた。しかし、それはあくまで「神学」であって、Christian や Islamic、また Tenrikyo という語を冠した神学ではなかった。

それぞれの宗教が独立して神学的営為を成している状況を言い換えるならば、各宗教伝統において積み重ねられている神学は、大きな「世界神学」として人類史に寄与している。もちろん、こうした意識で神学に携わっている者は少ないだろう。その一方で、グローバル時代において人類はさまざまな共通の諸課題に取り組んでいる。各宗教も共通の課題に対して、それぞれの視点で取り組んでいるとも言えるはずである。

私たちは絶えず変化する現在の状況に対応せざるをえない。スミスは、外からも内からも眺めるだけの批判的的自己意識をもつことの重要性を語っている。地に足を付けながらも、時代の荒波を乗り越えるだけの柔軟さを発揮することが、今こそ求められている。

[註]

(1) ウィルフレッド・C・スミス『世界神学をめざして—信仰と宗教学の対話』明石書店、2020 年、78 頁。

(2) 同上、78～79 頁。

(3) 同上、82 頁。